

## 国際化とピグマリオン

墨 保正

平成3年10月 「中和会のあゆみ」 寄稿文より

英語教師として一宮市の中学校にお世話になった昭和25年～60年の36年間を振り返るとさまざまなことが蘇ってくる。また最近では、国の内外を問わず「国際化」あるいは「学校では」といったニュアンスを含んだ言葉がマスメディアを通して、小さな社会にまで広がりつつあるので、この点についても関連した一面に触れてみたい。

私は終戦後の混沌とした世相の中、米軍第24歩兵連隊岐阜隊庶務課に勤務した後、縁あって、緑豊かな葉栗中学校に赴任した。「なんて堅苦しいところだろう」「自分は教師に向いているのだろうか」初めての学校でそう思ったが、諸先輩や生徒諸君の素朴さ、親切、心の温かさに囲まれて、兄貴のような気持ちでただがむしゃらに生徒と毎日を過ごしていた。そんな折、市教委から内地留学のすすめがあり「米国教育心理学」を宮沢博士に学び、やっと落ち着き、教師としての自覚も生まれ、それが教育と心理学を密接にとらえるきっかけとなった。

中部中学校、(昭和31～40年)では、日本語の中の外国語という意味での実用英語を研究し、又、県文化研究所において勤務評定の資料の翻訳等にたずさわり、学校の組織、道徳、学習指導法を研修した。「中和会」にては、父母との親睦をはかり、地域の社会性を養った。丁度、この頃受験英語が台頭しはじめ、新聞社、出版社の「進学のための講座シリーズ」、予想問題集、教科書準拠テストの原稿を、生徒の立場になって書き始めるが、南山大学の恩師パツへ学長、ライオン校長、教授から付属高校、名古屋の公、私立高校へ来ないかというお誘いがあり、迷っていた。牧野兼雄元教育長は「それは定年退職後でどうだ、それまで一宮でやっては、名古屋は遠いぞ」と言われ、一宮に留まることにした。

萩原中学校にては、LL指導、保健指導を研究し、余暇は釣りに興じた。

大和中学校、大和南中学校に於いても、各々の地域性を重んじ個性豊かで多感な生徒たちに暖かく目を向け、耳を傾げることに努め、彼等のすばらしい可能性を信じ教育に当たってきた。

この教師生活の間、英語教育に関しては特に「英語の生活化」「英語の国際化」に努めてきた。英文日記をはじめとして、文通、英語劇、英語弁論、アメリカン・スクールとの交流をおこない、東海三県英語弁論大会、ヒヤリング、学力コンテスト、英検等に参加し、たびたび上位に入賞した。これもそれぞれの中学校のご父兄、先生方のご支援とご協力のお陰であると思う。

最近、新聞、テレビでは連日のように校内、家庭内暴力の状況が報道され、“それを他人事ではない”と繰り返している。それほど子どもの情緒障害を思わせる事件が増えている。

お父さんお母さん方も大変心配し、「どう対処したらよいか」と相談を受けることが多くなっている。私がいつも答えているのは「社会の変動につれて、子育てが難しくなっているのは事実ですが、親と子が信頼し合い、年齢に相応した人間関係を育てていけば心配ありません」ということである。教育現場にいた時、問題児と言われた性行不良や情緒障害で特別な指導を必要とする生徒については、家庭訪問を行う一方、父母の相談に応じていた。そうした中で気付いたのは、問題児と言われる子どもたちのほとんどが環境や育て方に欠陥があって、本来の性格や発達が阻害されゆがめられた、ある意味では被害者なのだということであり、私はこの視点に立って、相談、指導をおこなってきた。

それでもいざ生徒の問題行動に直面すると、“よく話してわからせよう”と、お説教になる場

合が少なくなかった。それなら、理屈でなく心底から“やる気になる”指導をするにはどうしたらいいかと、自己も強化する方法も併せて模索していた。その大きな課題に応じてくれたのが、深層心理研究会の提唱しているカウンセリングマインドをベースにした「深層心理技法」であった。これは、基本的にはベルリン大学シュルツ博士の「自律訓練法」と同じ範疇に入るものであるが、研究会のメンバーが、教育相談に応用できるよう、現場の実践を踏まえて研究してきたものである。

その驚くべき教育効果をあげてみると、例えば、①教科書3年分を1年でマスターできる。②登校拒否が治る。③クラスの平均点が他のクラスより10点上がる。と枚挙にいとまがないが「心身をリラックスして精神の安定をもたらすとともに精神を高める」ことによって、阻害していた障害を取り除き、本来の力を取り戻そうというものである。子どもたちの心の中にはすばらしくて良き可能性が数限りなく潜んでいるのである。

一方、先に挙げたような著しい効果をもたらした研究事例から、それが単なる技法としてではなく、それ以外の何かが絶妙な効果を引き起こしていることがわかってきた。それは、ハーバード大学のローゼンソール博士の「ピグマリオン効果」と同じ類のもので、ギリシャ神話から名付けられている。この話は自分の理想女性像を彫刻で作った若者が最後には、その想いの像を人間にかえてしまい結ばれるという物語であり、「できると信じる心」が何事をも成し遂げるといのがピグマリオンの心である。以来、研究会では「ピグマリオン」を合い言葉に、その心を大切にし教育相談を行い、多くの成果を上げるに至ったのである。「ピグマリオンの心」をもてば、教師と生徒の間にある壁が自然に消え、「信じ合う心の絆」が生まれてくる。この絆こそが教育が忘れかけている黄金の絆である。もちろん、それは親と子の間にも忘れてはいけないものである。

子どもの限らない可能性が、すくすくと育っていくかどうかは、この黄金の絆をつくることができるかどうかを鍵だと私は信じているからである。

私は学校を離れた今も、生徒たちが明るく楽しい学校生活を送れ、自分の夢を実現できるように、教育カウンセリング、英語セミナーを行い、ストレス、登校拒否、学力不振などの悩みを解消するアドバイスをし、子どもたちの良い可能性を育てている。

昨年（1990年）は、深層心理西日本研究会を名古屋に発足させるのに加わり、東京にある深層心理研究会と同様、生徒、社会人への教育効果の向上、自己強化の手助けを行っている。また、名古屋国際センターの活動にも参加し、国際交流にも思いをはせている。

もとより「国際化」と「英語教育」の関係が大切な点については、誰もが認めるものだろうと思うが、今日の試験制度や暗記を中心とした教育は、その関係を単なる飾り物にしている感がある。最近では2000人以上も来日する英語補助教員や国際交流員たちは、厳しい試験制度の下に覆い隠され、生徒たちが異文化に接するという機会を希薄にしているように思える。この制度の緩和、生徒と教師の心の絆、対話を切に望みたい。そして、地域の教育が向上していけるように、父母と教師が共に手を取り合い、息の長い付き合いをしていけることを私は心から望みたい。それは、国際交流と同じ感覚ではないだろうか。そしてそれが「中和会のこころ」だと思う。

もはや国際化を論ずるときではない。実行の時代である。グローバルな視野に立ち、異文化を理解し合う、地球的な関心を育てていく、そんな教育が必要ではないだろうか。それが、国際化であり、ピグマリオンの心ではないだろうか！